

《講演会報告2》 2005年10月29日(土)

白隠の修行観と公案

小 濱 聖 子*

白隠慧鶴(1685-1768)は、江戸時代中期、静岡県原の松蔭寺を中心に活躍していた禅僧である。本講演では、その白隠の修行観(「見性(=悟り)」と「悟後の修行」)及びその修行に用いられる禅の公案について、現代の「自己」と「他者」という言葉をキーワードに述べた。

現在日本の臨済宗の法系(宗派)は全てこの白隠から出ており、彼は臨済宗中興の祖と呼ばれ、大量の禅画のほか多くの仮名や漢文の法語集、語録をのこしている。彼は1726年42歳の秋の深夜、松蔭寺の奥でひとり『法華経』を読んでいた際に大悟見性の体験をして以後、民衆への仏教教化活動にそれ以前よりも一層励んだという。この42歳を境に、彼の84年間に及ぶ人生は前半・上求菩提の自利行と、後半・下化衆生の利他行とに区切って語られることが多い。見性及び悟後の修行の二つが、彼の思想において重要とされる所以である。またこの二つは、白隠の著作では幾度も「転」という語によって表現されていることが見出される。

白隠の思想を述べるならば、まず彼は、修行者に「見性」つまり「自己の本性を見る」ための修行として公案を用いることを勧めた。公案とは、中国の唐から宋代にかけて成立した禅の師弟間における問答、いわゆる禅問答である。そこでは、自己の本性を見るということをめぐって師が質問を出し、それに対して弟子が如何に即答するかという修行が行われる。弟子は師の問いをひたすら考え大きな疑いを抱き続け

ることによって、限界状況に陥り、一種の自己崩壊、自己の転覆といった体験をする。これが見性の体験である。

この公案は、しばしば禅独特の対話だと言われる。ところで、「対話」というものが一般に対等な「自己-他者」間において行われるものであるとするならば、公案はあくまで師と弟子、つまり仏教を「知る-知らない」、「教える-学ぶ」関係においてなされるものであるから、これでは対話とは呼べない。しかし、そこに見性という機縁を含むことによって、公案では学ぶ者が「知る」者へと転じる。そこに一つの対等な「自己-他者」関係が成立し、独特の対話をなしているのではないかと考えられる。

自己の追究は、このように公案という他者からの問いかけによって、疑いを深めるといふ修行によって行われるのである。つまり他者によって自覚へ到るといふことであり、この考えを推し進めるならば、自己と他者とは関係し合って存立していると言えらる。両者は共に相互の関係を築いていこうとするはたらき・実践によって成り立っている。公案を用いて自己を疑い追究し限界に達して、そこで一旦崩壊が起る。その限界という外部、他なるもの、いわゆる他者に一転して気付く。自己の本性に覚めるというのは、要するに「それのみで存在する自己自体」などというものが結局は考えられないものであり、自己を他者との関係に見付けることなのだとも言えるのではないだろうか。そして、これに気付いた時には既に「自己-他者」関係が成立している。この瞬間が見性であ

*お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科
博士後期課程在学

り、公案とは、師という他者から問いかけられる第一のきっかけである。

そして、この問いかけへの返答が「一転語」（全集2、421頁）である。この一転語を打ち出すことは、白隠にとって、それ以外の香を炊いたり供え物をならべたり礼拝したりすることよりも、何にも勝る仏への報恩行だと考えられている。見性は宗教的な体験として言語化するのは不可能であるが、修行者が一度その境地に往ってから再び現実に還って、その世界を構成し把握し直して自己の言葉で表現したものが一転語となる。例えば白隠は、彼の師であった道鏡慧端の言を引いて「真正安楽の田地に到らんと欲せば、転悟転挙、転了転参せよ」（全集1、491頁）と述べるのだが、ここでは修行者が「転悟」つまり見性を繰り返し自己を変転していかねばならないものであり、それによって世界は本当の安楽の世界へと転じて行くと言っている。このように、一度見性しても、その後繰り返し続けること、悟後の修行が必要なのである。

要するに、他者からの声に耳を傾けて聴き、また自己からの声を他者に聞かせる対話の場というのは、その両者が相互にはたらきかけて時間を共有する動的な場である。それは常に我々の世界においてあらゆる時と場所に起り得る可能性を蔵している。この世界において、他者と

の遭遇を繰り返し、対話の場を現実に呼び起こして可能性を現前させ続けることを、白隠は「公案」及び「見性」と「悟後の修行」ということによって人々に喚起しているのではないだろうか。そのような白隠の修行観は、現代の我々にも見るべき所が多いと考えられる。

以上が今回の主な内容であるが、その他仏教では重要な戒律という問題に関して、最後に白隠の戒律観について少し触れた。禅というと、規則等に拘らず自由闊達に奇抜なことをするといったイメージもあるが、これは単なる自分勝手と同義ではない。特に白隠は経典や語録を尊重し、規律に厳しい態度をとっていた。規則や習慣を徒にないがしろにするのではなく、徹底的に仏道を究める姿勢を修行者に求めたのである。そうした彼の経典や祖師を非常に重視する姿勢は、堅苦しい印象にもなり易い。しかし、その思想が決して狭量なものでないことは、皇族や武士から庶民まで幅広く支持もされたことが示していると思われる。詳しい研究は以後の課題であるが、彼の戒律観は、これらを手掛かりに見ていくことができる。

■主な参考文献

『白隠和尚全集』全8巻、龍吟社、1934年